

＜神様への愛の応答＞ （雅歌 5章 2～6節、8章 2～7 節）

「雅歌」ほどに、歴史神学的に豊かな「多様な解釈」が繰り広げられた書も珍しい。大きく分けると、「字義通りの解釈法」と「比喩的な解釈法」に分かれる。

現代の聖書学では、「字義通りの解釈」だけを受け入れて、「比喩的解釈」を退けるという行き方をしやすいが、古代教会の伝統であった比喩的な解釈法にも「霊的な豊かさ」があり、ルターなどにも大きな影響が見られる。

それらを全部否定してしまう必要はないだろう。現代の字義的解釈と古代～中世までの比喩的解釈を比較・折衷しながら、雅歌を読み解いていきたい。

冬に閉ざされたガリラヤの田舎村（農村）に、自分の所有する「ぶどう園」の視察に訪れる宮廷の王が、シュラムの女に呼び掛けて「春の郊外デート」に誘っている。

＜現代聖書学の「字義的解釈」による本書の再構成＞

起きている事柄による時系列は ②→③→①→④→⑤ の順番と想定される。

場面②： 婚約前のロマンスを追憶する …… （2：8～3：5）

場面③： 結婚式における上京・挙式の描写 …… （3：6～5：1）

⇒ 田舎の農村から都の宮廷に大行列（輿車）を伴って迎え入れられるシュラムの女

場面①： 結婚式における愛の誓い …… （1：2～2：7）

場面④： 2 人の結婚生活上のズレ …… （5：2～6：9）

⇒ 王との夜を拒否してしまう女、すれ違う 2 人の関係、そこからの回復

場面⑤： ガリラヤ（の妻の実家）への夫婦旅行 …… （6：10～8：14）

＜雅歌における比喩的解釈の一例＞

「わが愛する者よ、ひき籠もっていないで、立って外へ出てきなさい」（＝呼び掛け）

「私たちの愛のぶどう畑を食い荒らすキツネがいる。キツネを捕らえよ。」（＝注意）

「わたしはケダルの天幕のように黒いけれども美しい」⇒ 罪を覆う「神の義」

「わたしのナルドは香りを放った」⇒ キリストの香りを放つ者へと変えられる

＜「神への清い愛」が 私たちを天上へと至らせる＝ 霊的上昇論＞

古代～中世のキリスト教会において、「雅歌」は比喩的解釈が施され、男女の水平的な愛の交わりではなく、神と人との垂直的な呼応関係、特に、神の招きに先導されて、霊的な段階を上昇して魂を清められながら、神との祝福された合一（結婚）へと向う魂の上昇プロセスとして解釈されていた。
（⇒オリゲネスやベルナルドゥスによる比喩的・霊的解釈の手法）

肉体、魂（精神）、霊の 3 区分に合わせて、肉的な人、魂的な人、霊的な人というように、信仰者にも霊的成長の度合いや段階が存在している、とオリゲネス等は考えている。（パウロも、コリント書のなかで、肉の人、霊の人、霊的な乳飲み子、霊的に成熟した大人、という区別をしている）

しかし、この霊的上昇（＝神への純粋な愛と思慕）のプロセスを妨げてしまい、地上（罪性・肉性）に縛り付けて引き戻そうとする様々な障害がある。

「神と天界へ上昇させる愛」を妨げる障害・阻害要素をいかにクリアして、神への純粋な愛を常に変わらず燃え立たせて、祝福の婚姻を成就していくか？ということが「雅歌」で謳われる主題となっている。

- （１）神以外の「この世の事物」に対する愛着・執着 ＝ 肉の人、外なる人の問題
- （２）悪魔による霊的惑わし（偶像崇拜）＝ ぶどう園を荒らしまわるキツネ
- （３）私自身を「彼のもの」として「完全に明け渡し委ねる」 ＝ 愛の応答への拒否

私たちの心の中から、神への純粋な思慕の愛、神だけを求める純粋な愛以外の雑多な欲望や情念や動機がすべて駆逐・排除されて、ただ「神への純粋な思慕の念」

によって満たされるまでは、神との祝福された霊的な一致は成就されない。

(例) ナルドの香油を注いだ女は、この純粋な愛を体現している人物と解釈できる。
彼女は高価な(300 デナリ)の「ナルドの香油」を惜しみなく、主のために注いだ。
ここに「献身」ということの真髄、本質が示されている。愛による完全な応答である。

「愛がおのずから起こるまで待ってください」(= 神への愛による応答)
⇒ 神様はわたしたちの「自発的な応答」を待っておられる。土足で心の中に踏み込んで来られて、愛を強要される方ではない。

<ルターの霊的結婚論 = 聖なる交換の神学>

信仰によって、新婦が新郎とひとつにされるように、魂がキリストと一つにされる。
この結合によって、キリストが所有されるものは、信仰者のものとなり、信仰者の魂が所有するものはキリストのものとなる。キリストは一切の霊的宝と祝福とを待っておられるが、我々は一切の不徳と罪を負っている。ここに喜ばしい交換が始まる。
キリストは、その結婚指輪によって、信仰者の魂を自分のものとされ、その罪を代わりに負われるのであり、私たちの魂は、その結納品として、罪から解放され、霊的な自由と祝福、神の義を与えられるのである。(「キリスト者の自由」第 12 項)

あなたがたは、完全に内的な人、まったく霊的な存在になっているのではなく、そのことは終わりの日までは成就していない。地上においては初めと前進とがあるのみである。
その約束が成就されるまでは、肉に注意して、霊を求める生き方をすべき。
(「キリスト者の自由」第 19 項)

「終わりの日」「約束の日」=再臨というテーマが関係してくる。
キリストも「十人の乙女の譬え」をされているが、花婿である再臨のキリストは、いつ到来(再臨)されるかが乙女たちには分からない。
その終末に向けての準備を整えて日々を歩んでいるかどうか?が問われる。

<全体の主題：「最初の愛」に立ち帰る>

私は愛する人のもの。／あの方は私を求めています。私の愛する人よ／さあ、野原に出かけましょう。／ヘンナの中で夜を過ごしましょう。早く起きて、ぶどう畑に行きましょう。／ぶどうの木がつぼみをつけたか、花盛りか／ざくろの花が咲いたかを見ましょう。

そこで私の愛をあなたに差し上げましょう。（雅歌 7:11～13）

りんごの木の下で、私はあなたを目覚めさせました。そこは、あなたの母があなたを身ごもった所。／そこは、あなたを産んだ母が身ごもった所。

印章のように、私をあなたの心に／印章のように、あなたの腕に押し付けてください。愛は死のように強く、熱情は陰府のように激しい。／愛の炎は熱く燃え盛る炎。大水も愛を消し去ることはできません。／洪水もそれを押し流すことはありません。（雅歌 8:5～7）

雅歌の全体的なストーリー（時系列）としては、

結婚前の求愛→挙式・上京→愛のすれ違い（愛の喪失、愛する人を見失う事態）→田舎に戻っての再会、という起承転結を見い出すことができる。

（現代聖書学の釈義による）

信仰的マンネリや、偶像への執着、この世を愛する愛、神への愛から引き離す妨害など、様々な障害が「結婚生活」には付いて回るが、当初の愛の誓い、純粹さに立ち帰るようにとの勧めが為されている、と読むことが自然な読み方だろう。

2:4 しかし、あなたに対して責むべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。

2:5 そこで、あなたはどこから落ちたかを思い起し、悔い改めて初めのわざを行いなさい。

3:20 見よ、わたしは戸の外に立って、たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしはそこの中にはいって彼と食を共にし、彼もまたわたしと食を共にするであろう。

3:21 勝利を得る者には、わたしと共にわたしの座につかせよう。それはちょうど、わたしが勝利を得てわたしの父と共にその御座についたのと同様である。（黙示録）

私たちも、神を信じる前の虚しい暗闇のような歩み（魂の暗夜）を思い起こしながら、この世の何物より、純粹に神様と天の御国を愛し求める「最初の愛」に常に立ち帰っていくことができますように。（祈）